

論 文

# 契丹小字文献における「母音間のg」 ‘Intervocalic g’ in the Khitan Small Script

大 竹 昌 巳

(京都大学大学院文学研究科博士後期課程／日本学術振興会特別研究員)

ŌTAKE Masami

(Graduate School, Kyoto University / JSPS Research Fellow)

## 目 次

はじめに

1. 契丹文字と契丹語
  - 1.1. 契丹文字
  - 1.2. 契丹語の系統
2. モンゴル諸語における母音間のg
  - 2.1. 脱落する母音間のg
  - 2.2. 母音間のgに関する仮説とその問題点
3. 契丹語における母音間のg
  - 3.1. 母音間のgの脱落
  - 3.2. 母音間のgの保存
  - 3.3. 母音間のgの音声実態
4. 契丹小字文献による母音間のg仮説の検証

おわりに

## はじめに

近年における契丹文字文献の解読の進展に伴い、契丹語の姿が明らかになりつつある。それによって、契丹語をモンゴル系言語の音韻史の資料として利用する道が開けてきた。本稿は、そのような試みの一つとして、契丹語における「母音間のg」のありようを明らかにするとともに、それによってモンゴル語音韻史の課題を克服しようとするものである。

第1節では、本稿が資料として扱う契丹文字および契丹語(特にモンゴル諸語との関係)について略述する。第2節では、本稿の主題であり、モンゴル語音韻史の重要な論点の一つである「母音間のg」について、その現象とそれを説明するための仮説およびその問題点について略説し、その仮説が現時点では支持あるいは否定する有力なデータをもたないことを示す。第3節では、契丹語での母音間のgのありようを、モンゴル諸語との同源語の比較、異形態における綴字交替、漢字音写との対

応、テキストでの書き誤り等から明らかにする。第4節では、第3節で明らかにしたデータを利用して、第2節で述べた母音間のgに関する仮説の是非を検証する。

## 1. 契丹文字と契丹語

### 1.1. 契丹文字

契丹文字は契丹人が自らの言語である契丹語を書き表すために創出した文字体系で、契丹大字と契丹小字という2種類の異なる文字体系が知られる。ともに遼朝(契丹国)(916-1125)の太祖耶律阿保機(在位916-26)の治下に製字されたとされ、このうち契丹小字は太祖の弟耶律迭剌が回鶻(ウイグル)の使者にその言語と文字を習い、それによって制ったという記述が『遼史』に見える<sup>1)</sup>。契丹大小字は遼代を通じて使用され、続く金代(1115-1234)にも使用されたのち、死文字となった。

1922年に至って、遼朝の皇帝陵である慶陵から未知の文字で書かれた2面の哀冊(皇帝・皇后等の哀辞)が出土し、羽田(1925)によって契丹小字であると正しく同定された。現在までに発見されている契丹小字資料はほとんどが哀冊・墓誌銘であり、近年発見が相次いでその総数は40点を超えた。既発表資料中、最古のものは遼の重熙22年(1053)、最も新しいものは金の大定15年(1175)の年紀をもつ。一方、現在利用できる契丹大字資料は約10点の墓誌銘とその他いくつかの資料に限られる。資料の制約および研究の進展度合から、本稿は契丹小字文献のみを対象とする。

契丹小字は400種類程度の字素(grapheme)を組み合わせて字(graph)を形成し、それによって語を表記する。各字素はそれぞれ音価をもち、一部は表語的(logographic)にも使用される<sup>2)</sup>。

### 1.2. 契丹語の系統

中国の文献史料には「室韋」(「失韋」とも)と呼ばれる民族集団の中に「蒙兀(EMC \*mōuŋ.ŋuət<sup>3)</sup>室韋」という下位集団があったことが記録され(『旧唐書』巻199下 北狄伝室韋条)、これがのちのモンゴル部の母体になったと考えられている(白石2001: 5-9、宮脇2002: 36-39)。

契丹と室韋とが言語系統を同じくしていたらしいことは文献史料に記されているが<sup>4)</sup>、実際、契丹小字文献から知られる契丹語の少なくない数の語彙がモンゴル諸語と共通しており(表1)、その範囲は基礎語彙や文法形態素にも及ぶことから、両者は同一の祖語に遡ると考えることができる。

表1：契丹語とモンゴル語の同源語の一例<sup>5)</sup>

契丹小字	翻字	転写	語義	WMo.	MMo.	Mong.	OTü.	WMa.
介女	qaṗ-ur	qaṗr	春	qabur	qabur (P)	xabār	yay (R)	niyengniyeri
弓女	jū-un	jūn	夏	jun	jun (P)	ḡon	yaz (R)	juwari
公乃女	ēn-am-ur	namur	秋	namur	namur (P)	namār	küz (R)	bolori
及早	ū-ul	ūl	冬	ebül	übül (P)	öböl	qış (R)	tuweri
包	qūr	qūr	三	γurba (n)	qurban (P)	gorāb	üč (R)	ilan
足	dur	dur	四	dörbe (n)	dörben (P)	dorōb	tört (R)	duin
戈	taṗ	taṗ	五	tabu (n)	tabun (P)	tab	beš (R)	sunja
扌	dil	dil	七	doloṗa (n)	dolo'an (P)	dōlō:	yeti (R)	nadan
忝	iš	iš	九	yisü (n)	yisün (P)	jos ~ jis	toquz (R)	uyun

契丹は鮮卑の後裔を自称するが<sup>6)</sup>、北魏(386-534)を建国した鮮卑族拓跋部の言語もモンゴル語と共通の語彙を多く含んでおり(白鳥1970a、Boodberg 1936、Ligeti 1970、Vovin 2007等)、一部の語彙においては契丹語と拓跋語に類似の形式が見られ、モンゴル諸語とは大きく異なることがある(武内2013、表2)。したがって、契丹語とモンゴル諸語の間には、直線的な先祖・子孫関係もなければ、契丹語と拓跋語ほど近い親縁関係もないが、祖語を共有している以上、両者の共通祖語に遡るような事象を研究対象とすることは可能である。

表2：拓跋語・契丹語・モンゴル語の語彙比較

語義	拓跋語(または鮮卑語)			契丹語		モンゴル語		
	音写	EMC	再構音	契丹小字	転写	WMo.	MMo.	Mong.
黄色い	饒楽	niēu.lak	*ńorag	𐰺	ńorūq <sup>w</sup>	sira	šira (H)	jar
犬	若干	niak.kan	*ńakan	𐰺𐰺	ńāq	noqai	noqoyi (P)	noxcæ:
白い	素和	suo.fua	*suṗa	𐰺	sū	čayan	čaqa'an (P)	ʧaqa:n
婦義、礼	豆盧	dəu.luo	*doro	𐰺	dor	törö	törö, töre (H)	tor

## 2. モンゴル諸語における母音間のg

### 2.1. 脱落する母音間のg

モンゴル語、カルムイク語、ブリヤート語、ダグール語、シラ・ユグル語などの現代モンゴル諸語では、モンゴル文語のVγVまたはVgV(Vは母音)という音連続に対して、多くの場合に長母音・二重母音が対応する(表3上段)。この現象は一般に、文語ではγ, gで表記される母音間の何らかの子音が脱落した結果、前後の母音が縮合して長母音・二重母音が形成されたものと考えられており、この脱落する子音は「脱落する母音間のγ/g」などと呼ばれている(以下では曖昧性が生じない限り「母音間のg」と略す)。しかし、母音間であればすべてのγ/gが脱落するわけではなく、脱落しない例も相当数存在する(表3下段)。両者の違いはウイグル式モンゴル字文献を除く中期モンゴル語諸文献においても見ることができる(表3右部には漢字文献の例を挙げる)。

表3：現代モンゴル諸語における母音間のγ/gの対応例<sup>7)</sup>

	WMo.	Mong.	Kalm.	Bur.	Dag.	ShYg.	語義	『華夷訳語』	転写
脱	bayatur	ba:tār	baater	baatar	ba:tur	ba:tār	英雄、勇士	把阿秃兒	ba'atur
	ayula	o:l	uule	uula	aul	u:la	山	阿兀刺	a'ula
	qoγoson	xo:sōn	xoosen	xooho (n)	xo:sun	xu:sən	空の	𠵼𠵼𠵼孫	qo'osun
落	degere	də:r	deerə	deere	də:r	di:re	上に	迭額 <sup>5)</sup> 列	de'ere
	jegüdü (n)	ɟy:d	zүүдэн	zүүде (n)	ɟəud	ɟy:dən	夢	沼兀敦	jewüdin
非	baya	baγ	baye	baga	—	baga	小さい	—	—
	boγoni	bəγm	boγeni	bogoni	boγun <sup>1)</sup>	bəγəno	低い、短い	孛 <sup>14)</sup> 𠵼泥	boqoni
	egeči	əγɟ	egə	egeše	əkɟ	əgeɟə	姉	額格赤	egeči

なお、母音間のgが脱落する変化(A)と、結果生じた母音連続が縮合して長母音や二重母音になる変化(B)とは別個の音変化であって、中期モンゴル語の一部の文献、たとえばパスパ字文献や『元朝秘史』等の漢字文献などは、Aの変化のみを経た段階であると一般的には考えられている。

## 2.2. 母音間のgに関する仮説とその問題点

上記のような文語の母音間のγ/gの二類の対応を説明するため、これまでにいくつかの仮説が提出されてきた。多くの学者が、少なくとも過去のいずれかの段階で、脱落する母音間の子音と脱落しないそれとの間に音声的あるいは音素的な差異があったことを想定する。例えば服部(1939)は、13世紀初頭において、脱落しないγ/gが閉鎖音 [g], [q] であったのに対し、脱落する母音間のγ/gは調音点に於ける狭めのゆるい非常に弱い摩擦音 [ɣ] であったとする。Janhunen (1999, 2003) も Proto-Mongolicの段階として脱落しないγ/gに \*gを、脱落するγ/gにvelar spirant \*xを再構する<sup>8)</sup>。これらの仮説によれば、母音間のγ/gが脱落するか否かは母音間の子音の違いに帰せられる。例えば(ここでは脱落する母音間のγ/gを \*γで表記する)：

\*/bayatur/ [bakatur] > ba'atur > bātur > Mong. ba:tār

\*/baga/ [baga] > baga > baga > Mong. baγ

この仮説では、ウイグル式モンゴル字文献で(延いてはモンゴル文語でも)脱落する母音間のγ/gと脱落しないγ/gが同一の表記をなされることについて、ウイグル文字で [g] と [ɣ] とを区別する手段がなかったために、ともに <q> (ḡeth) で表記し、同様に [g] と [ɣ] も <k> (kāph) で表記した結果、表記上の区別がないのだと説明することができる(服部1939)。

一方、何人かの学者は、上記のような子音の音価の違いを変化の一段階として仮定しつつも、さらにそれ以前の段階では両者が同一の音素 \*gに遡ると考える。そして両者の発展の違いを、後続する母音のアクセントの有無(Ramstedt 1902: 22, 1957: 88, Владимирцов 1929: 216, Poppe 1965: 179)や母音の長短(服部1959, Poppe 1959, 1960: 41, 1962, 1967)による条件変化により説明しようと試みる<sup>9)</sup>。Poppe (1959) および服部(1959)によれば、長母音の直前にある音素 \*gは摩擦音化して脱落する一方、短母音の直前にある \*gは破裂音のまま残る<sup>10)</sup>：

\*/bagātur/ [baga:tur] > [baɣa:tur] > ba'atur > bātur > Mong. ba:tār

\*/baga/ [baga] > [baga] > baga > baga > Mong. baγ

この仮説では、母音間のgの脱落の結果として生じる長母音(二次的長母音)とは別に、母音間のgが弱化する段階で長母音(一次的長母音)が存在していることが前提となる。言うまでもなく、現代モンゴル諸語ではすでに母音縮合が生じた後なので、縮合する以前の段階で母音が長かったかどうかは検証不可能であるから、この仮説の是非は別の方法によって検証する必要がある。

Poppe(1959、1962)はトゥングース語族のソロン語等への借用語との対応からこれを裏づけることができるとした。これらの言語に残る一部の借用語にはモンゴル語の母音間のgが保存されているが、その直後の母音は常に長いというのである(表4上段)。ところが、Ponne(1931)のソロン語語彙集を確認すると長母音が対応しない例も同数程度あり(表4下段)、しかも他の辞書・語彙集を見るかぎりPonne(1931)が長母音を記録している位置には軒並み短母音が対応する。したがってこのデータを \*gの直後に長母音を再構する論拠とはなしえない。

表4：モンゴル語からソロン語への借用語例

WMo.	MMo.	Mong.	語義	Ponne (1931) 『鄂漢詞典』		OTü.
imaya (n)	ima'an (H)	ima:	山羊	<i>imayāā</i>	imayaŋ	imya (K)
temege (n)	teme'en (H)	tamə:	駱駝	<i>təməgāā</i>	təməyən	
emegel	eme'el (S)	əmə:l	鞍	<i>əməgāl</i>	əməyəl	
dayari (n)	da'ari (S)	dæ:r	鞍擦れ	<i>dagari</i>	dayraŋ	yayir (K)
qoriya (n)	qoriyan (H)	xərɜ:	囲い	<i>xorigā</i>	horɣaŋ	qoriy (K)
üniye (n)	üni'en (S)	uniə	乳牛	<i>unəgāā ~ unigā</i>	unuɣuŋ	

そもそもこの仮説で前提されている一次的長母音の存在は、研究者間でコンセンサスの得られたものではない。何人かの研究者が、モンゴル語、ダグール語、モゴール語などの現代モンゴル諸語に存在する(二次的長母音に由来しない)長母音を語族内部で、あるいは他語族の言語と比較することにより祖語に一次的長母音を再建しようと試みた(服部1959、野村1959、Poppe 1962、1965: 179、1967、Ligeti 1964等)が、矛盾のないデータが提示されているとは言えず、その存在には懐疑的な研究者も多い(Doerfer 1964、1970、1974、Janhunen 2003: 5、Svantesson *et al.* 2005: 113)。

結局、母音間のgの直後の母音が長かったという仮説は、一次的長母音が存在し、かつ、母音縮合が生じる以前の段階を反映した、母音の長さを書き分けることができる文字体系で表記された文献が存在しない限りは検証できない。

### 3. 契丹語における母音間のg

#### 3.1. 母音間のgの脱落

以下では、契丹語において母音間のgがどのような状態にあるのかを、同源語との比較によって明らかにする。

大竹(2013、2015c)は、契丹小字の母音(V)を表す字素および子音+母音(CV)を表す字素の母音が長いことを論証する過程で、現代モンゴル諸語の二次的長母音が契丹語の長母音と対応することを明

らかにしている(表5)。

表5：契丹語の長母音と現代モンゴル語の二次的長母音との対応<sup>11)</sup>

祖形	契丹小字	翻字	転写	語義	WMo.	MMo.	Mong.	OTü.
*-aya-	𐰽 𐰺𐰸	qā ām-ā	qā āmā	可汗 羊	qayan imaya (n)	qa'an (P) ima'an (H)	xɑ:n imɑ:	qayan (R) imya (K)
*-iya-	𐰽 𐰺𐰸	jā- et-āq-ā	jā- tāqā	告げる 鶏	jīya- takiya (n)	ja'a- (H) takiya (P)	ɟʒɑ:x tæxɪɑ	taqiyu (U)
*-ayu-	𐰽𐰺𐰸 𐰽𐰺𐰸 𐰽𐰺𐰸	eb-ār-ā-an eš-au-ā čal-ā	bārān šawā čalā	右 猛禽 石	barayun sibayu (n) čilayu (n)	bara'un (H) šiba'un (P) čila'un (P)	barɔ:n ʃobɔ: ʃʊlɔ:	
*-ayi-	𐰽𐰺 𐰽𐰺	ed-ā eš-ā	dā šā	敵、戦 善い	dain sain	dayin (S) sayin (P)	dæ:n sæ:n	yayi (R) say (K)
*-uyu-	𐰽𐰺-	dō-ol-	dōl-	聞く	duyul-	du'ul- (P)	dɔ:lǎx	
*-üye-	𐰽𐰺 -𐰽𐰺	er-ē -ed-ēr	erē -dēr	今 序数詞接尾辞	edüge -dUgAr	édü'e (P) -DU'Ar (P)	Dag. ədɔ: Dag. -dVr	
*-eye-	𐰽-	kē-	kē-	…と言う	keme-	ke'e- (P)	—	
*-iye-	𐰽𐰺	eč-ē	jē	甥、姪	jige	je'e (S)	ɟʒɔ:	
*-üyü-	𐰽	kū	kū	人	kümün	kü'ün (P)	Kalm. küün	

ただし、初頭音節にある \*AγU<sup>12)</sup>等は現代モンゴル語等では長母音になっているが、契丹語ではダグル語と同様に二重母音(母音+半母音u)である(表6)<sup>13)</sup>。まれに母音間のgに対して阻害音gが対応する不規則な例も見られる(表7上段)が、このような不規則な対応は現代のモンゴル諸語内部にも見られるものである(表7下段)。

表6：契丹語の二重母音と現代モンゴル語の二次的長母音との対応<sup>14)</sup>

祖形	契丹小字	翻字	転写	語義	WMo.	MMo.	Mong.	Dag.
*-ayu-	𐰽𐰺 𐰽𐰺	jaü čau-ur	jaü čaür	百 軍、戦	jaü (n) —	ja'un (P) ča'ur (S)	ɟʒɔ: —	ɟʒau —
*-eyü-	𐰽 𐰽𐰺	deü eü-ul	deü eül	弟 雲	degüü egüle (n)	de'ü (P) e'ülen (H)	du: u:l	dəu əulən
*-iyü-	𐰽𐰺𐰸	eš-eü-us	šeüs	露	šigüsü (n)	šī'üsü (P)	ʃu:s	—

表7：母音間のgの不規則対応<sup>15)</sup>

契丹小字	翻字	転写	語義	WMo.	MMo.	Mong.	Kalm.	Bur.	Dag.
𐰽𐰺𐰏	ej-eg-en	jegen	左	jegün	je'ün (H)	dʒu:n	züün	züü (n)	—
𐰽𐰺𐰘	ep-ul-ug <sup>w</sup>	pulug <sup>w</sup>	余りの	ilegüü	hüle'ü (H)	ilu:	ülüü	ülüü	xulu:
			指	quruγu (n)	quru'un (H)	xoro:	xuryen	xurga (n)	xoro:
			脇	suγu (n)	su'u (H)	so:	süü	huga	so:
			デール	debel ~ degel	de'el (H)	də:l	devəl	degel	də:lʃ

以上より、原則として契丹語ではすでに母音間のgが脱落し、母音縮合も生じていたということができる。ところで、漢字文献に記録された鮮卑・室韋諸語の語形を見る限り、これらの言語では少なくとも8世紀までは母音間のgがはっきりと残っていた(表8)<sup>16)</sup>。つまり、契丹語ではそれ以降に母音間のgが脱落したということになる。

表8：唐代以前の鮮卑・室韋諸語における母音間のg<sup>17)</sup>

漢字音写	EMC	語釈	WMo.	MMo.	Mong.	典拠
鳥侯秦	teu.fəu.dziēn	*土	toγoso (n)	to'osun (P)	tɔ:s	『魏志』東夷伝鮮卑条
託紇臣	t'ak.fət.dziēn	*土	toγoso (n)	to'osun (P)	tɔ:s	『隋書』北狄伝契丹条
土護真	t'uo.fuo.tsiēn	*土	toγoso (n)	to'osun (P)	tɔ:s	『新唐書』北狄伝奚条
可寒	k'a.fian	官家	qayan	qa'an (P)	xɑ:n	『宋書』鮮卑吐谷渾伝
契害真	k'iət.fai.tsiēn	殺人者	kiduyçi	kidu'açi (S)	xɪdägɟʃ	『南齊書』魏虜伝
折潰真	dziət.fuai.tsiēn	為主出受辞人	jiloyoçi	—	dʒɔlb:ɟʃ	『南齊書』魏虜伝
莫賀咄	mak.fɑ.t'uət	渠帥	bayatur	ba'atur (S)	bɑ:tār	『隋書』北狄伝室韋条

### 3.2. 母音間のgの保存

以上見たところによると、契丹語では母音間のgが脱落し、失われてしまったように見える。ところが、表5中のいくつかの語は、接尾辞が後続する環境で異形態をもつ(表9)。これらの異形態に現れる字素 𐰽, 𐰺, 𐰏, 𐰘 (ほかに 𐰽, 𐰺, 𐰏) は、いくつかの理由から、次のように共通の子音Xを含む(母音+子音X)という音価をもっていると考えられる(大竹2014a: 86-89)：

𐰽 (aX), 𐰺 (äX), 𐰏 (oX), 𐰘 (üX), 𐰽 (uX), 𐰺 (iX), 𐰏 (eX)

他の一般的な母音語幹や子音語幹に接尾辞が後続する場合にはこの子音を含む字素が現れない(表10)から、この子音Xは語尾の一部ではなく語幹の一部とみなさなければならない。

表9：母音間のgを含むいくつかの語の語形変化(表中、括弧で括ったのは挿入母音。表10も同様)

語義	祖形	単数						複数	
		ゼロ		属格・対格		与位格		ゼロ	
可汗	*kaya/n	𐰽	qā	𐰽𐰺𐰍	qāX-(a)-n	𐰽𐰺𐰍	qāX-(a)-nd	𐰽𐰺𐰍	qāX-(a)-d
敵	*dayi/n	𐰽𐰺	dā	𐰽𐰺𐰍 <sup>18)</sup>	dāX-(a)-n	𐰽𐰺𐰍	dāX-(a)-nd	𐰽𐰺𐰍	dāX-(a)-d
善	*sayi/n	𐰽𐰺	sā	𐰽𐰺𐰍	sāX-äi	𐰽𐰺𐰍	sāX-(a)-nd		
人 <sup>19)</sup>	*küyü/n	𐰽	kū	𐰽𐰺𐰍	kūX-(u)-n	𐰽𐰺𐰍	kūX-(u)-nd		
	*suya	𐰽, 𐰽𐰺	sū	𐰽𐰺𐰍	sūX-(ü)-n				

表10：一般的な母音語幹名詞(上段)・子音語幹名詞(下段)の語形変化

語義	祖形	単数						複数	
		ゼロ		属格・対格		与位格		ゼロ	
時	*po/n	𐰽	pō	𐰽𐰺	pō-n	𐰽𐰺	pō-nd	𐰽𐰺	pō-s
行宮	*ordū	𐰽𐰺	ordū	𐰽𐰺𐰍	ordū-n	𐰽𐰺𐰍	ordū-nd	𐰽𐰺𐰍	ordū-d
言葉	*kele/n	𐰽𐰺	kel			𐰽𐰺𐰍	kel-(e)-nd	𐰽𐰺𐰍	kel-s
日、昼	*nari/n?	𐰽	nār	𐰽𐰺	nār-ī	𐰽𐰺	nār-(e)-nd	𐰽𐰺	nār-(e)-ń
夜	*söni	𐰽𐰺	suń	𐰽𐰺𐰍	suń-(e)-n	𐰽𐰺𐰍	suń-(e)-nd		

ところで、契丹小字には〈母音+軟口蓋阻害音q/g<sup>20)</sup>〉を表す一連の字素が別に存在し、〈母音+子音X〉を表す一連の字素とは峻別されることから、この子音Xは軟口蓋阻害音ではない。しかし、軟口蓋音q, gと子音Xとは後続母音の選択制限が共通している。例えば、属格・対格接尾辞 /-n/ が附加される際の挿入母音のふるまいに関して、語幹末子音が軟口蓋音q, gである場合と子音Xである場合とは、一般的な子音の場合とは異なる共通の特徴をもつ(表11)。

表11：子音語幹への属格・対格接尾辞 /-n/ 附加時の挿入母音(下線部)のふるまいの例

語幹末	接尾辞	語幹末	接尾辞	語幹末	接尾辞	語幹末	接尾辞	語幹末	接尾辞
-𐰽	-aq	-𐰽	-an	-𐰽	-al	-𐰽	-as	-𐰽	-an
-𐰽	-oq <sup>w</sup>	-𐰽	-on	-𐰽	-ol	-𐰽	-os	-𐰽	-on
-𐰽	-uq <sup>w</sup>	-𐰽	-un	-𐰽	-ul	-𐰽	-us	-𐰽	-un
-𐰽	-eg	-𐰽	-en	-𐰽	-el	-𐰽	-es	-𐰽	-en

これは次のように説明される。最も無標な挿入母音はeである。ただし、後部軟口蓋音qはRTR (retracted tongue root) 素性<sup>21)</sup>をもつので、その直後では同じRTR素性をもつ最も無標な母音aが挿入される。前部軟口蓋音gはRTR素性をもたないから挿入母音はeである。また、円唇化前部軟口蓋音g<sup>w</sup>はROUND(またはLABIAL)素性をもつので、その直後ではROUND素性をもつ最も無標な母音uが挿入される。円唇化後部軟口蓋音q<sup>w</sup>の場合はRTR, ROUND両方の素性をもつので、そのような素性をもつ母音o, ũが直前の母音の広さに応じて挿入される。このことから推測するならば、子音XにもRTRおよび円唇性の有無による音価の差があったはずである。そのような調音位置は軟口蓋を



において他に想定しがたいことから、子音Xは何らかの軟口蓋音と考えてよい。このことは、借用語とみられる語彙中の子音Xが古代テュルク語の軟口蓋音γ/gや鮮卑語の軟口蓋音と対応することからも裏付けられる(表12)。

表12：契丹語の子音Xと古代テュルク語および鮮卑語の軟口蓋音との対応<sup>22)</sup>

契丹語						OTü.	鮮卑語	
契丹小字	翻字	転写	漢字音写	元代音	語義		漢字音写	EMC
𠵹𠵽-	qā-aX-	qāX-	呵	xə	可汗	qayan (R)	可寒	k'a.fian
𠵹𠵽𠵽	tī-iX-in	tīXin	惕隱	ti.iǝn	(職名)	tegin (R)	直勳	ḏiǝk.giǝn
𠵽𠵽	uX-ē	uXē	于越	y.ye	(称号)	ögä (R)	—	—

以上を要するに、子音Xは母音間のgに対応する位置に現れる軟口蓋音である。このことから子音Xが母音間のgに対応する音素であるのは明らかである。つまり、契丹語では接尾辞が後続する環境で母音間のgが保存されているのである。

### 3.3. 母音間のgの音声実態

それでは当時の契丹語の母音間のgはどのような音声実現をしていたのであろうか。これを知るために子音Xを含む語を同時代の漢字音写と比較したのが表13である。

表13：同時代文献(漢文墓誌)における契丹語の子音Xの漢字音写例

契丹小字	翻字	転写	漢字音写	元代音	語義	漢字音写の典拠
𠵽𠵽	uX-ē	uXē	于越	y.ye	(称号)	『耶律羽之墓誌銘』(942年)
𠵹𠵽𠵽	tī-iX-in	tīXin	惕隱	ti.iǝn	(職名)	『耶律元寧墓誌銘』(1008年)
𠵽𠵽𠵽𠵽	ord-el-aX-ā-añ	ordlaXāñ	烏特懶	u.ḏai.lan	(人名)	『耶律宗福墓誌銘』(1071年)
𠵽𠵽𠵽𠵽	eš-or-aX-ā-añ	šoraXāñ	述刺	šy.la	(人名)	『耶律仁先墓誌銘』(1072年)
𠵽𠵽𠵽	ūX-uj-ī	ūXūyī	烏煨	u.uši	(氏族名)	『耶律承窺妻蕭氏墓誌銘』(1091年)

この子音Xは、早期の資料でも「于越」や「惕隱」のように頭子音ゼロの音節で音写されて軟口蓋音g-, x- で音写される例がないことから、契丹小字が創られた10世紀前半の段階ですでにかなり微弱な音声であつたらしい。そこで、文字創製時の子音Xの音価としては、服部(1939)が中期モンゴル語の母音間のgに想定したような、「調音点に於ける狭めのゆるい非常に弱い摩擦音」[ɣ ~ ʁ]を想定するのがよいと考える(以下ではγ, ʁと簡略表記する)：

𠵽 <ak>, 𠵽 <äɣ>, 𠵽 <okʷ>, 𠵽 <ūɣʷ>, 𠵽 <uɣʷ>, 𠵽 <iɣ>, 𠵽 <ey>

その一方で、「烏特懶」「述刺」のような表記では -lakāñ, -rakāñに対応する部分が「懶(lan)」「刺(la)」一字で音写されており、子音 ʁ/ɣ がすでに脱落して母音縮合が生じていた可能性さえ疑われる。実際、現在出土している11世紀後半以降の契丹小字テキストを見ると、子音 ʁ/ɣ を含む字素で書かれるべき箇所が長母音を表す字素で表記されたり、逆に長母音で書かれるべき箇所が子音 ʁ/ɣ を含む字素で表記されたりする“書き誤り”を随所に発見することができる(表14)。このことから、11世紀

後半には少なくとも一部の環境、一部の方言において契丹語の母音間のgが音声の実態を失って母音縮合が生じていたと考えられる<sup>23)</sup>。

表14：契丹小字墓誌に見られる子音 ʁ/ɣ に関連する“書き誤り”

本来の綴字				“正しくない”綴字			
契丹小字	翻字	転写	語義	契丹小字	翻字	転写	典拠
𐰽𐰺𐰍𐰏	uy <sup>w</sup> -ul-ey-ēn	uyuleyēn	嫁いだ	𐰽𐰺𐰍	ū-ul-ēn	ūlēn	『耶律紉里墓誌銘』(1102年)
𐰽𐰺	kū-us	kūs	力	𐰽𐰺𐰍	kū-uy <sup>w</sup> -us	kūyus	『耶律抄只墓誌銘』(1082年)
𐰽𐰺𐰏	ord-ū-ud	ordūd	諸行宮	𐰽𐰺𐰏	ord-ūʁ <sup>w</sup> -ud	ordūʁūd	『耶律承窺墓誌銘』(1101年)
𐰽𐰺𐰏	eš-ā-ál	šāl	郎君	𐰽𐰺𐰏	eš-aʁ-ál	šarál	『耶律蒲速里墓誌銘』(1105年)

#### 4. 契丹小字文献による母音間のg仮説の検証

契丹語には、モンゴル語の二次的長母音と対応する長母音(表5)とは別の由来をもつ長母音が存在する(表15)。ところでテュルク語族では、サハ語(ヤクート語)やトルクメン語等の現代語や文献資料を根拠に、祖語に一次的長母音を再構することができる<sup>24)</sup>。表15においてテュルク諸語と共有される語に着目すると、そのいずれもがテュルク祖語で長母音を再構可能な語であるので、契丹語の表15のような長母音は契丹語内部の改新により生じたものではなく、祖語から継承されたものと考えられる。つまり、契丹語を含むモンゴル系言語にはかつて一次的長母音が存在し、契丹語はその長母音を保持していると考えられる(大竹2015c: 92f)<sup>25)</sup>。

表15：契丹語の一次的長母音<sup>26)</sup>

祖形	契丹小字	翻字	転写	語義	WMo.	MMo.	Mong.	テュルク諸語
*-ō-	丹及子- 𐰽𐰺	eb-ō-ol- dō-or	bōl- dōr	なる 下	bol- doora	bol- (P) doro, dora (H)	bolōx dō:r	Sakh. <b>buol-</b> (< *bōl-)
*-ū-	𐰽𐰺 𐰽𐰺	jū-un ord-ū	jūn ordū	夏 行宮	jun ordo (n)	jun (P) ordo (H)	dʒon ord	Sakh. <b>ordu</b>
*-ō-	𐰽𐰺	mē-ēr	mēr	道	mör	mör (P)	mor	
*-ū-	𐰽𐰺	kū-us	kūs	力	küčü (n)	küčün (P)	kuɟ	Trkm. <b>güič</b> , Sakh. <b>küüs</b>
*-ī-	𐰽𐰺	eč-ī-iš	čīš	血縁	čisu (n)	čisun (H)	ɟōs	
*-ē-	𐰽𐰺	ed-ēm-	dēm-	加える	neme-	neme- (P)	namōx	

そこで契丹語文献を利用して、第2節で論じた母音間のgに関する仮説を検証することができる。服部(1959)・Poppe(1959)の仮説によれば、母音間のgの直後の母音は長い。例えばWMo. qayan《可汗》、WMo. kümün《人》の祖形とその変化は服部(1959)の表記に則れば以下のようになる：

- (1) / \*kagaan/ [qaqa:n] > / \*kagaan/ [qaya:n] > /kagaan/ [qaqa:n] > /ka'aan/ [qa'a:n] > /kaan/ [qa:n]  
 (2) / \*kübüün/ [kyby:n] > / \*kübüün/ [kyby:n] > /kügüün/ [kyky:n] > /kü'üün/ [ky'y:n] > /küün/ [ky:n]

この第二音節の長母音は、「一次的」長母音である以上、モンゴル諸語と契丹語の共通祖語に遡っても長母音として存在していたはずであり、契丹語が一次的長母音を保持している以上、契丹語でもこれらの語が長母音を引き継いでいなければならない。上記の長母音仮説が正しいならば、接尾辞が後続する環境では(3)の段階にあるとみなしうる契丹語で、それぞれの語形は $q\bar{a}v\bar{a}$ -,  $ku\bar{y}\bar{u}$ - (契丹語では語末の $n$ は基本的に脱落する)のような形をとることが予想されるが、表9で見たように、これらの語の在証形はその予想とは反する(表16)。

在証される契丹語の形式は、これらの祖形の語幹末にむしろ短母音があったことを示唆する( $*ka\bar{y}a$ -,  $*k\bar{y}\bar{u}$ -)。なぜならば、契丹語では語幹末の短母音がすべて脱落する(大竹2015c: 86)のに対し、長母音は脱落しないからである(表15 *ordū* 《行宮》参照)。

表16：長母音仮説が予想する語幹形式と在証される語幹形式(接尾辞後続時)

予想される形式			在証される形式		
契丹小字	翻字	転写	契丹小字	翻字	転写
𐰽𐰺𐰸-	$q\bar{a}-av\bar{a}-$	$q\bar{a}v\bar{a}-$	𐰽𐰺-	$q\bar{a}-av-$	$q\bar{a}v-$
𐰽𐰺𐰶-	$k\bar{u}-u\bar{y}w\bar{u}-$	$k\bar{u}\bar{y}\bar{u}-$	𐰽𐰺-	$k\bar{u}-u\bar{y}w-$	$k\bar{u}\bar{y}\bar{u}-$

以上より、 $*g$ の直後に長母音を仮定することで母音間の $g$ の生起を説明しようとする服部(1959)等の仮説は、契丹語のデータによるかぎり否定されなければならない。

## おわりに

本稿では以下の結論を得た。契丹語では、基本的に母音間の $g$ が脱落して母音縮合が生じ、長母音や二重母音が形成されている(3.1節)。しかし、一部の語は、接尾辞が後続するという環境では母音間の $g$ を保存している(3.2節)。ただ、契丹語の母音間の $g$ は契丹小字創製まもない10世紀前半にすでに微弱な音声であつたらしく、11世紀後半の文献では消失していた徴証が見出される(3.3節)。以上が契丹語の母音間の $g$ について本稿が明らかにしたところであるが、この成果をふまえ、契丹語が祖語の一次的長母音を保持しているという特徴も利用することにより、母音間の $g$ の生起を後続母音の長短の違いによって説明する仮説が否定されなければならないことを示した(4節)。これにより契丹小字文献のモンゴル語音韻史上に占める重要な位置づけが示されたものと考えている。

### 〔注〕

- 1) 『遼史』によると、契丹大字は神冊5年(920)に製字・頒行された。一方、契丹小字の創製年については具体的な年記は記録されていない。白鳥(1970b: 47f)は契丹小字が大字よりも後に創られたという前提の下、『遼史』の回鶻遣使記事から契丹小字創製の年を天贊3年(924)または翌4年と推定している。
- 2) 字形上、契丹小字の字は字素を左上、右上、左下、右下、また左下、右下、…の順に綴って形成するが、本稿では便宜上、字素を左から右へ横一列に並べて表記する。例えば、字  $\begin{matrix} \text{丹} \\ \text{左} \\ \text{右} \end{matrix}$  は  $\text{丹左右天}$  と表記する。また本稿では、各々の契丹小字表記に対して字素の翻字(transliteration)と字の転写(transcription)を提示する。契丹小字の推定音価や綴字規則、転写法には研究者間にコンセンサスのない部分もあるが、本稿は基

- 本的に大竹(2014a、2015c)に依拠する。母音のローマ字表記とその大凡の推定音価は次の通り：a [a], e [ə], ä [ɛ], ë [e], o [ɔ], ö [œ ~ ø], û [o ~ ʊ], u [u], i [i]。ä と ë および u と û は長母音の場合および軟口蓋音と組み合わせられる場合を除いて表記上の区別がない。
- 3) 参考として前期中古漢語(Early Middle Chinese; EMC)の推定音を平山(1967)(音価および表記を一部改めた)によって示す。
  - 4) 室韋について「語与庫莫奚、契丹、豆莫婁国同。」(『魏書』卷100失韋国伝)、契丹について「与奚、室韋密邐、土俗言語大概近俚。」(『遼史』卷116国語解)とある。
  - 5) モンゴル文語(WMo.)の語形とその転写法は内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所〔編〕(1999)に拠り、転写法は一部改める。すなわち、 $\chi$ はqに、xはkに改め、分綴を示すためのアンダースコア( )は省略する。現代モンゴル語の発音表記も同書に拠る。中期モンゴル語文献はTumurtogoo(ed.) (2010)所収のパスパ字諸文献(P)および漢字文献である甲種『華夷訳語』(H)、『元朝秘史』(S)を用いる。漢字文献のローマ字転写は栗林〔編著〕(2003、2009)に拠る。また、比較のため他語族の言語として古代テュルク語(OTü. : 突厥語(R)、古代ウイグル語(U)およびカラハン=テュルク語(K))と満洲文語(WMa.)の語形を挙げる。古代テュルク語はClouston(1972)に拠り、転写法は一般的な表記に改める。満洲文語は河内〔編著〕(2014)に拠る。
  - 6) 漢文『耶律羽之墓誌銘』(会同5年(942))に「其先宗分佉首〔契丹人の始祖奇首可汗を指す〕、派出石槐。歴漢魏・随〔隋〕唐已来、世為君長。」とあり、2世紀後半の鮮卑大人であった檀石槐と関係づけている。
  - 7) カルムイク語(Kalm.)はМуннива(ред.) (1977)、ブリアート語(Bur.)はЧеремисов(сост.) (1973)、ダグール語(Dag.)は恩和巴図等〔編〕(1984)、シラ・ユグル語(ShYg.)は保朝魯等〔編〕(1985)に拠り、キリル文字をローマ字転写するなど適宜表記を改めて示す。
  - 8) Svantesson *et al.* (2005: 121-124)もJanhunenの \*x を \*h で表記するものの、基本的な考えは同じである。
  - 9) ただし、モンゴル語族において音韻論的に有意義なアクセントの対立が存在する(あるいはかつて存在した)とは一般に考えられておらず、アクセント仮説は十分な裏づけをもたない。
  - 10) 服部(1959)は同様の仮説に基づき、WMo. kebeli, Bur. xeeli, MMo. ke'eli (H)《腹》、WMo. kümün, Kalm. küün, MMo. kü'ün (P)《人》のような文語のVbV, VmVと現代語の長母音(中期語のV'V)との対応を \*b の直後に長母音を仮定して説明しようとする(\*kebeli > ke'eli)。
  - 11) 契丹語とモンゴル諸語との同源語の同定はそれぞれ次の研究に拠る。WMo. qaγan : 清格爾泰等(1977: 67、1985: 116f)。WMo. imaya (n)《山羊》: 同(1977: 92、1985: 150f)。WMo. jiγa- : 宝玉柱(2005: 132)。WMo. takiya (n) : 清格爾泰等(1977: 64、1985: 110)。WMo. barayun : 即実(1996: 658)。WMo. sibayu (n) : 愛新覺羅(2004a: 76)。WMo. čilayu (n) : 大竹(2015c: 88)。WMo. dain : 即実(1996: 247)。WMo. sain : 同(1996: 266)。WMo. duγul- : 大竹(2015c: 91)。WMo. edüge : 豊田(1985)。WMo. -dUgAr : Wu & Janhunen(2010: 57)。WMo. jige : 即実(2012: 329)。WMo. kümün : 豊田(1991: 110)。なお、契丹語kē-《…と言う》を大竹(2015b: 2, 3)はMMo. ke-(WMo. ge-?)の同源語とみなしているが、中期モンゴル語文献ではke'e-(ge'e-)の方が一般的であるから、本稿ではMMo. ke'e-(WMo. keme-)の同源語とみなす。
  - 12) Aは {a, e}、Uは {u, ü} を兼ね表す記号として使用する。また、母音間のgを \*γで表記する。
  - 13) 契丹語の第一音節の二重母音とモンゴル語の \*VγVが対応するという記述が愛新覺羅(2004a: 75f)に見られるが、そこに挙げられている例は、本稿で同源語と認定した語を除けば、いずれも音対応や意味の推定に難がある。なお、\*AγUに由来する音連続が初頭音節で二重母音を保持し、非初頭音節では長母音になるという点で契丹語とダグール語は特徴を同じくするが、非初頭音節における長母音への変化の様相は異なる。契丹語では非初頭音節の \*aγuはāとなるのに対し、ダグール語では o: または u: になる(大竹2012: 30)。
  - 14) 同源語の同定は以下の研究に拠る。WMo. jayu (n) : 王弘力(1986: 64)。MMo. ča'ur : 即実(1996: 175, 283)およびHambis(1953: 125)。WMo. degüü : 即実(1982: 59)。WMo. egüle (n) : 同(1996: 3, 282f)。WMo. sigüsü (n)《液汁》(cf. WMo. sigüderi《露》) : 吳英喆(2007: 100)。なお、契丹語のdeγは嚴密には「同性の男性年下きょうだい」を表し、モンゴル語のdegüü《男性年下きょうだい》とは表す意味領域が異なる(大

- 竹2014b)。
- 15) 同源語の同定は以下の研究に拠る。WMo. *jegün* : 即実(1996: 658)。WMo. *ilegüü* : Wu & Janhunen (2010: 141f)。
  - 16) ただしその具体的な音価ははっきりしない。というのも、中古漢語には有声の喉子音として破裂音 *g*- (群母)も摩擦音 *fi-* (~ *ɣ*-) (匣母)も存在したものの、両者はきわめて限られた分布をなしていたからである。表に挙げた例では、母音間の *g* が常に匣母字で音写されているが(俟 *fiəu*、紇 *fiət*、護 *fiuo*、寒 *fian*、害 *fiat*、潰 *fiuɪ*、賀 *fia*)、これは当時の母音間の *g* が摩擦音であったことを必ずしも意味しない。なぜならば、対立する *gəu*, *gət*, *guo*, *gan*, *gai*, *guai*, *ga* のような音配列は少なくとも中古漢語には存在しなかったからである。同様に、「紇真 (*fiət.tsiēn*)」《30》(WMo. *ɣuči* (n))において匣母字が使われているからといって、この語の初頭子音が摩擦音であったことを必ずしも意味しない。
  - 17) これらの音写語のモンゴル同源語との比定は白鳥(1970a)、Boodberg(1936)、Ligeti(1970)、Vovin(2007)に拠る。
  - 18) 契丹小字テキストでは頭子音 *d-* は字素 𐰃 で、頭子音 *t-* は字素 𐰄 で表わすのが基本ではあるが、特に語頭において、弱子音 *b*, *d*, *j*, *g* が強子音 *p*, *t*, *č*, *k* と表記上の区別なく書かれる場合がある。そのため、語 𐰃𐰄, 𐰃𐰄火, 𐰃𐰄𐰆 は 𐰄𐰄, 𐰄𐰄火, 𐰄𐰄𐰆 とともに表記される。偶々 \**𐰃𐰄火* が在証されないため、ここでは 𐰄𐰄火 という表記を用いた。なお、弱子音と強子音の書き分けは後期になるほど厳密になる(傅林2013)。
  - 19) 拓跋語「素和 (*suo.fua*)」《白い》(表2参照)との比較からこの語を母音間の *g* の例に加える (cf. WMa. *suwayan* 《黄色》)。また陳曉偉(2011)も参照。
  - 20) 契丹語では少なくとも表記上、WMo. *q*, *ɣ* に対応する音素が *q* しかない(*q* の音価はおそらく摩擦音 [*χ*] で、語中では有声化したかもしれない)。また、契丹語では強子音 *p*, *t*, *č*, *k* は語頭にしか立たず、どの環境にも立ちうるのは弱子音 *b*, *d*, *j*, *g* のみである(武内2015)。
  - 21) 契丹語には母音調和として男性母音 *a*, *ä*, *o*, *û* とその他の母音との対立がある。この両者の区別および後部軟口蓋音と前部軟口蓋音との区別を説明するためにRTR素性を用いる。
  - 22) 漢字音写「惕隱」との同定は即実(1991: 27)、「于越」との同定は清格爾泰等(1977: 76、1985: 129)に拠る。また、これらの称号については愛新覺羅(2004b: 132-134)および松井(2013)、武田(2013)を参照。なお、拓跋鮮卑語の音写語「直𪛗 (*diäk.giän*)」において破裂音 *g*- (群母)が用いられているが、このことはこの語の母音間の子音が摩擦音でなかったことを否定するものではない。中古漢語には、対立する *fiän* という音連続が存在しなかったからである。
  - 23) 現時点で最も古い3件の墓誌『耶律宗教墓誌銘』(1053年)、『興宗皇帝哀冊』(1055年)、『蕭慎微墓誌銘殘石』(1057年)はいずれも『遼史』に伝のある耶律良(?-1070)の撰で、その中には子音 *ɪ/ɣ* に関わる綴字の誤りがまったく見られない。また、やはり『遼史』に名が見え、『道宗皇帝哀冊』(1101年)をはじめ出土しているだけで9件の墓誌(1092年以前-1115年)を撰じた耶律固の文章にも綴字のミスは少ない。一方、1071-82年撰述の3件の墓誌の撰者である蕭忽突堯(1041-91)や、1101-05年の3件の墓誌の撰者である耶律陳団奴の文章には、この手の誤りが散見される。このことが示すように、こうした綴字の混乱の多寡は、時代の早晚もさることながら、撰者の教養・知識レベルの高低にも関係しているようである。
  - 24) 研究史の概略は竹内(1957: 43f)を参照。
  - 25) WMo. *doora* 《下》(ウイグル式モンゴル字文献でも同じ綴り)は偶発的にモンゴル語に一次的長母音が残存した例とみなせるかもしれない。
  - 26) 契丹語とモンゴル諸語との同源語の同定は以下の研究に拠る。WMo. *bol-* : 大竹(2015c: 92)。WMo. *doora* : 同。WMo. *jun* : 劉鳳翥、青格勒(2003: 197)。WMo. *ordo* (n) : 王弘力(1987: 64)。WMo. *mör* 《跡道》: 大竹(2015b: 8)。WMo. *küčü* (n) : 大竹(2015a)。WMo. *čisu* (n) 《血》: 即実(1988: 56)。WMo. *neme-* : 新積。サハ語(Sakh.)はSakhaTyla.Ruのオンライン辞書、トルクメン語(Trkm.)はБаскакова и др. (ред.) (1968)に拠り、キリル文字をローマ字転写して示す。

〔略 号〕

Bur.	ブリヤート語	Kalm.	カルムイク語	R	突厥語	U	古代ウイグル語
Dag.	ダグル語	MMo.	中期モンゴル語	S	『元朝秘史』	WMa.	満洲文語
EMC	前期中古漢語	Mong.	現代モンゴル語	Sakh.	サハ語	WMo.	モンゴル文語
H	甲種『華夷訳語』	OTü.	古代テュルク語	ShYg.	シラ・ユグル語		
K	カラハン=テュルク語	P	パспа文字文献	Trkm.	トルクメン語		

〔参考文献〕

〈和中文〉

- 愛新覺羅烏拉熙春(Aisingioro Ulhicun) (2004a) 「契丹語与蒙古語」『契丹語言文字研究』京都：東亜歴史文化研究会, pp. 59-78.
- (2004b) 「契丹突厥札記」『遼金史与契丹女真文』京都：東亜歴史文化研究会, pp. 127-139. (『立命館文学』586: 1-24, 2004年にも所収)
- 荒川慎太郎ほか〔編〕(2013)『契丹〔遼〕と10～12世紀の東部ユーラシア』東京：勉誠出版.
- 宝玉柱(2005)「契丹小字183号227号原字研究」『中央民族大学学报(哲学社会科学版)』2005(2): 130-136.
- 保朝魯(Bulučilayū)等〔編〕(1985)『東部裕固語詞彙』呼和浩特：内蒙古人民出版社.
- 清格爾泰(Čenggeltei)等(1977)「關於契丹小字研究」『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』1977(4): 1-97(契丹小字研究專号).
- (1985)『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社.
- 陳曉偉(2011)「再論契丹“五色紀年說”——以契丹小字 𐰽 為中心」『文史』2011(4): 175-184.
- 杜・道爾基(Du Dorji)〔編著〕(1998)『鄂漢詞典』海拉爾：内蒙古文化出版社.
- 恩和巴因(Engkebatu)等〔編〕(1984)『達斡爾語詞彙』呼和浩特：内蒙古人民出版社.
- 傅林(2013)「論契丹小字与回鶻文的關係及其文字改革」『華西語文学刊』8: 58-67.
- 羽田亨(1925)「契丹文字の新資料」『史林』10(1): 82-96. (『羽田博士史学論文集 下巻言語宗教篇』京都：東洋史研究会, 1958年, pp. 420-434に再録)
- 服部四郎(1939)「蒙古語文語の起源について」『言語研究』3: 1-27. (『服部四郎論文集 第1巻 アルタイ諸言語の研究I』, 東京：三省堂, 1986年, pp. 125-157に再録)
- (1959)「蒙古祖語の母音の長さ」『言語研究』36: 40-54. (『服部四郎論文集 第3巻 アルタイ諸言語の研究III』東京：三省堂, 1989年, pp. 90-111に再録)
- 平山久雄(1967)「中古漢語の音韻」牛島徳次ほか〔編〕『中国文化叢書1 言語』東京：大修館書店, pp. 112-166.
- 即実(1982)「契丹小字字源挙隅」『民族語文』1982(3): 54-60, 11.
- (1988)「從 𐰽 𐰾カ 説起」『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』1988(4): 55-69.
- (1991)「《紉隣墓誌》釈読述略」『東北地方史研究』1991(4): 24-29, 23.
- (1996)『謎林問径——契丹小字解読新程』瀋陽：遼寧民族出版社.
- (2012)『謎田耕耘——契丹小字解読続』瀋陽：遼寧民族出版社.
- 河内良弘〔編著〕(2014)『満洲語辞典』京都：松香堂書店.
- 栗林均〔編著〕(2003)『『華夷訳語』(甲種本)モンゴル語全単語・語尾索引』仙台：東北大学東北アジア研究センター.
- (2009)『『元朝秘史』モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』仙台：東北大学東北アジア研究センター.
- 劉鳳翥、青格勒(2003)「契丹小字《宋魏国妃墓誌銘》和《耶律弘用墓誌銘》考釈」『文史』2003(4): 194-208.
- 松井太(2013)「契丹とウイグルの關係」荒川ほか〔編〕(2013)pp. 56-69.
- 宮脇淳子(2002)『モンゴルの歴史 遊牧民の誕生からモンゴル国まで』東京：刀水書房.
- 内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所〔編〕(1999)『蒙漢詞典(増訂本)』呼和浩特：内蒙古大学出版社.

- 野村正良(1959)「モンゴル方言の長母音と原蒙古語に於ける長母音存在の可能性に就いて」名古屋大学文学部〔編〕『名古屋大学文学部十周年記念論集』名古屋：名古屋大学文学部，pp. 621-632.
- 大竹昌巳(2012)「ダグル語の音韻——共時的記述と通時的記述——」『地球研言語記述論集』4: 13-44.
- (2013)「契丹語的元音長度——兼論契丹小字的拼写規則」『華西語文学刊』8: 86-96.
- (2014a)「契丹小字の体系的解読の試み」京都大学大学院文学研究科修士論文.
- (2014b)「關於契丹語的兄弟姊妹稱謂系統」『KOTONOHA』142: 1-16.
- (2015a)「契丹語の奉仕表現」『KOTONOHA』149: 1-15.
- (2015b)「契丹小字文献所引の漢文古典籍」『KOTONOHA』152: 1-19.
- (2015c)「契丹小字文献における母音の長さの書き分け」『言語研究』148: 81-102.
- 白石典之(2001)『チンギス=カンの考古学』東京：同成社.
- 白鳥庫吉(1970a)「東胡民族考」『白鳥庫吉全集 第4巻 塞外民族史研究 上』東京：岩波書店，pp. 63-320.  
(『史学雑誌』21(4, 7, 9), 22(1, 5, 11, 12), 23(2, 3, 10-12), 24(1, 7), 1910-13年初出)
- (1970b)「契丹女真西夏文字考」『白鳥庫吉全集 第5巻 塞外民族史研究 下』東京：岩波書店，pp. 45-68. (『史学雑誌』9(11, 12), 1898年初出)
- 武田和哉(2013)「契丹国(遼朝)の北面官制とその歴史的変質」荒川ほか〔編〕(2013)pp. 115-128.
- 竹内和夫(1957)「Türk語の長母音について」『言語研究』32: 43-59.
- 武内康則〔撰〕、申英姫〔訳〕(2013)「拓跋語と蒙古語詞彙拾零」『華西語文学刊』8: 73-76.
- 武内康則(2015)『遼史』中の音写漢字に反映された契丹語の音声と音韻『内陸アジア言語の研究』30: 1-27.
- 豊田五郎(1985)「契丹小字 又 の新解釈について」『京都産業大学国際言語科学研究所報』7(1): 47-50.
- 豊田五郎〔著〕、那順烏日図〔訳〕(1991)「關於契丹小字的幾点探索」『内蒙古社会科学』1991(3): 105-114.
- 王弘力(1986)「契丹小字墓誌研究」『民族語文』1986(4): 56-70.
- (1987)「契丹小字中之契丹」『民族語文』1987(5): 63-65, 51.
- 呉英喆(2007)『契丹語静詞語法範疇研究』呼和浩特：内蒙古大学出版社.
- (欧文) (略号：JSFOu = Journal de la Société Finno-Ougrienne)
- Boodberg, Peter, A. (1936) The language of the T'o-pa wei. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 1(2): 167-185.
- Clauson, Sir Gerard (1972) *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford: Oxford University Press.
- Doerfer, Gerhard (1964) Langvokale im Urmongolischen?. *JSFOu* 65(4): 1-21.
- (1970) Langvokale im Urmongolischen? II. *JSFOu* 70(1): 1-24.
- (1974) Bemerkungen zum Vokalismus des Monguor (Langvokale im Urmongolischen? III). *JSFOu* 73: 36-94.
- Hambis, Louis (1953) Premier essai de déchiffrement de la langue khitan. *Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres* 97(1): 121-134.
- Janhunen, Juha (1999) Laryngeals and pseudolaryngeals in Mongolic problems of phonological interpretation. *Central Asiatic Journal* 43(1): 115-131.
- (2003) Proto-Mongolic. In: Juha Janhunen (ed.) *The Mongolic Languages*. London; New York: Routledge, pp. 1-29.
- Ligeti, Louis (1964) Les voyelles longues en moghol. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 17(1): 1-48.
- (1970) Le Tabghatch, un dialecte de la langue Sien-pi. In: Louis Ligeti (ed.) *Mongolian Studies*. Amsterdam: B. R. Grüner, pp. 265-308.
- Poppe, Nicholas [Nikolas] (1959) On the velar stops in intervocalic position in Mongolian. *Ural-Altische Jahrbücher* 31: 270-273.
- (1960) *Vergleichende Grammatik der altaischen Sprachen, Teil 1: Vergleichende Lautlehre*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

- (1962) The primary long vowels in Mongolian. *JSFOu* 63 (2): 1-19.
- (1965) *Introduction to Altaic Linguistics*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- (1967) On the long vowels in common Mongolian. *JSFOu* 68 (4): 1-31.
- Ramstedt, G. J. (1902) Das schriftmongolische und die Urgamundart phonetisch verglichen. *JSFOu* 21 (2): 1-55.
- (1957) *Einführung in die altaische Sprachwissenschaft I: Lautlehre*. Helsinki: Suomalais-Ugrilainen Seura.
- Svantesson, Jan-Olof et al. (2005) *The Phonology of Mongolian*. Oxford: Oxford University Press.
- Tumurtoogoo, D. (ed.) (2010) *Mongolian Monuments in 'Phags-pa script: Introduction, Transliteration, Transcription and Bibliography*. Taipei: Institute of Linguistics, Academia Sinica.
- Vovin, Alexander (2007) Once again on the Tabgač language. *Mongolian Studies* 29: 191-206.
- Wu Yingzhe & Juha Janhunen (2010) *New Materials on the Khitan Small Script: A Critical Edition of Xiao Dilu and Yelü Xiangwen*. Folkestone: Global Oriental.
- 〈露文〉
- Владимирцов, Б. Я. (1929) *Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия: введение и фонетика*. Ленинград: Издание Ленинградского Восточного Института имени А. С. Енукидзе.
- Муниева, Б. Д. (ред.) (1977) *Калмыцко-русский словарь*. Москва: Русский язык.
- Поппе, Н. Н. (1931) *Материалы по солонскому языку*. Ленинград: Издательство Академии Наук СССР.
- Баскакова, Н. А. и др. (ред.) (1968) *Туркменско-русский словарь*. Москва: Советская Энциклопедия.
- Черемисов, К. М. (сост.) (1973) *Бурятско-русский словарь*. Москва: Советская Энциклопедия.
- SakhaTyLa.Ru *Якутско-Русский Словарь* <http://sakhatyla.ru/> (最終アクセス : 2015年9月29日)

〔附 記〕

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)「契丹語・契丹文字の歴史言語学的・文字類型論的研究」(課題番号26・3830)の助成を受けた研究成果の一部である。本研究は筆者の修士論文の一部(大竹2014a: 86-99)に大幅な加筆・修正を行ったもので、その間、日本モンゴル学会2015年度春季大会で同題の口頭発表を行った。会場でコメントを下された皆様、また本稿に対して懇切丁寧なコメントを下された匿名査読者に感謝申し上げます。